

今週の為替相場見通し(2022年7月11日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		134.80 ~ 136.56	136.13	133.00 ~ 138.00
ユーロ (1ユーロ=)	(ドル)		1.0072 ~ 1.0462	1.0186	0.9950 ~ 1.0300
	(円)		136.88 ~ 142.36	138.60	136.00 ~ 140.00
英ポンド (1英ポンド=)	(ドル)		1.1877 ~ 1.2164	1.2032	1.1900 ~ 1.2100
	(円)	*	160.40 ~ 165.29	163.76	161.00 ~ 166.50
豪ドル (1豪ドル=)	(ドル)		0.6762 ~ 0.6895	0.6856	0.6700 ~ 0.6940
	(円)	*	91.53 ~ 93.99	93.31	91.00 ~ 94.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 133.00 ~ 138.00 円

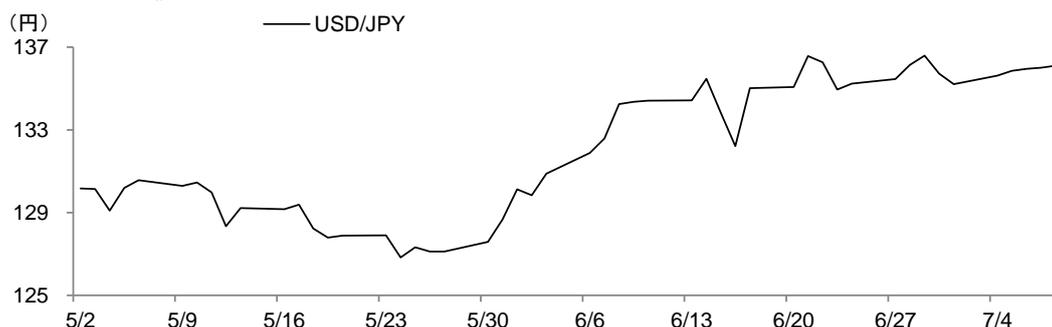
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は値幅を伴いながらも方向感のない展開。週初4日、135円ちょうど付近でオープンしたドル/円は、東京時間に一時週安値の134.80円をつけた後、株式市場の堅調推移にじり高の展開。5日、ドル/円はバイデン政権による対中関税の一部撤廃期待によるリスク選好地合いでドル買いが強まり、一時136.36円まで上値を伸ばすも、海外時間ではドル売りに転じ、135円台半ばまで下落した。6日、ドル/円は世界的な景気減速への懸念を背景にリスク回避の動きが強まり135円台前半を中心とした値動きだったが、米国時間に入り米6月ISM非製造業景況指数の結果や、景気よりインフレ抑制を重視する姿勢を強調したタカ派的なFOMC議事要旨にドル買いが加速し、一時的に136円を突破。その後小反落も下値は堅く、135円台後半での小動きとなった。7日、ドル/円はアジア時間に下げ幅を広げるも、米高官のタカ派的な発言や米長期金利の上昇に反発した。8日のドル/円は136円前後での取引が継続した後、安倍元首相の襲撃を受け円買いが強まり135円台半ば付近まで下落。海外時間は、米6月雇用統計が予想外の好結果となったことを受けてドル/円は上昇、136円台前半にてクローズした。

今週のドル/円相場も引き続き日米の金融政策差を背景にドル買い円売りの流れが継続すると予想。但し、今週はインフレ指標の発表も予定されており、インフレのピークアウトが意識されればドル売りに転じる可能性についても警戒したい。先週は、米利上げに伴う景気減速懸念が意識され米2年債と米10年債の利回りが逆転する場面も見られるなど、ドル/円においてはドル買い一辺倒とはならなかった。週末は、米6月雇用統計の結果が予想外の好結果となったことで、ドル/円は136円台を回復したが、利上げによる景気減速懸念が燦る中、インフレ指標の減速が見られればドル売りが優勢となるのではないかと。特に、ユーロ圏でも景気減速懸念が広がり対ユーロではドル買いが優勢となっている中、円についてはドル売りの受け皿となり円高が進行しやすい環境となっているのではないかと。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/4~7/8)の値動き: 安値 134.80 円 高値 136.56 円 終値 136.13 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 0.9950 ~ 1.0300 136.00 ~ 140.00 円

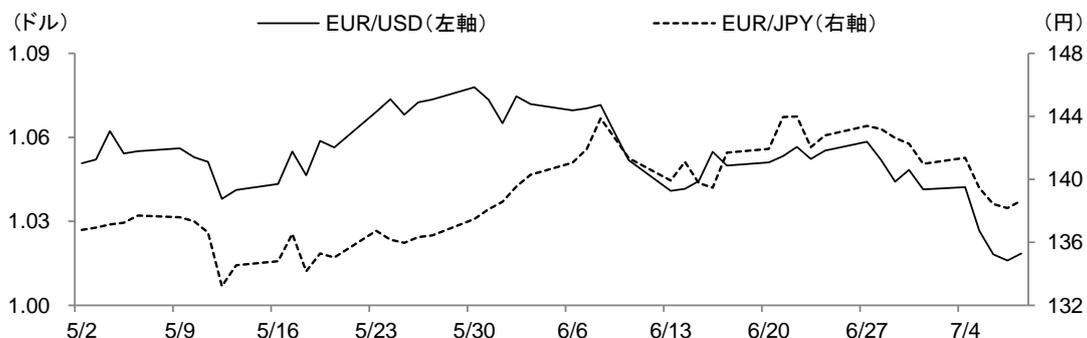
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は大幅に続落し、約20年ぶりの安値を記録。週初4日、1.0435付近でオープンしたユーロ/ドルは株式市場の堅調推移を受けリスク選好の動きからユーロ買いが強まり、一時週高値の1.0462まで上値を伸ばすも、その後は上値の重い推移となった。5日、ユーロ/ドルは欧州経済を巡る先行き不透明感が拡がる中、独エネルギー会社の債務不履行懸念や欧州債利回り低下を背景にリスク回避の動きが加速し、1.02台前半まで急落、約20年ぶりの安値をつけた。6日、ユーロ/ドルは前日の安値圏で小動きも、海外時間では欧州を中心とした世界的な景気減速懸念からリスク回避の動きが活発化する中、米経済指標の良好な結果やFOMC議事要旨のタカ派的な内容に米長期金利が急上昇、ドル買い優勢となり軟調地合いは継続した。7日、ユーロ/ドルはFRB関係者のタカ派発言や米長期金利の上昇が重しとなり前日の安値を更新する1.0145まで軟化した。8日、安倍元首相銃撃とのヘッドラインが出ると、リスク回避の円買いから1.0072まで下落し安値を更新。その後、好調な米6月雇用統計を受けて米リセッション懸念が後退すると、ユーロ/円が買われる動きにユーロドルも1.0191まで値を戻し、1.0186で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は上値の重い展開を予想。先週は天然ガス急騰を受けたユーロ圏の景気減速が懸念され、一時1.0072と約20年ぶりの安値をつけるなどパリティ割れも視野に入った。ECB高官が7~9月の利上げ方針を示す中で宣言通りの正常化が進むのかとの懸念が引き続きユーロの重しとなっている他、4日発表のドイツの貿易収支における統計開始以来の赤字転落も足枷となっており、今後も欧州景気の懸念材料となりそうだ。21日(木)の次回ECB政策理事会を前に、来週発表予定のユーロ圏7月ZEW景気期待指数やユーロ圏5月貿易収支が厳しい結果となれば、利上げによる欧州経済の腰折れ懸念が高まり、パリティ割れを試す展開も現実味を帯びてくるだろう。一方、米経済は良好な指標が続いているため、一時2.7%台に低下した米長期金利は3.0%付近まで上昇。米6月雇用統計も市場予想を上回り過度な懸念が和らいでいることから、ドルが買われやすくユーロ/ドルの下押し圧力は強まりそうだ。ユーロ/円相場は、米経済指標次第とみられる。13日(水)米6月CPI、15日(金)米6月小売売上高、ミシガン大学消費者マインドなど今後の利上げペースを左右する重要指標が続く。ドル/円が上値を試す展開となればユーロ/円も連れ高となるため、留意したい。今週は、12日(火)に独7月ZEW景気期待指数、ユーロ圏7月ZEW景気期待指数、13日(水)独6月CPI確報値、15日(金)ユーロ圏5月貿易収支の発表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/4~7/8)の値動き: (対ドル) 安値 1.0072 高値 1.0462 終値 1.0186
(対円) 安値 136.88 高値 142.36 終値 138.60



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部 マクルヒル ジョセフ

(1)今週の予想レンジ: 1.1900 ~ 1.2100 161.00 ~ 166.50 円

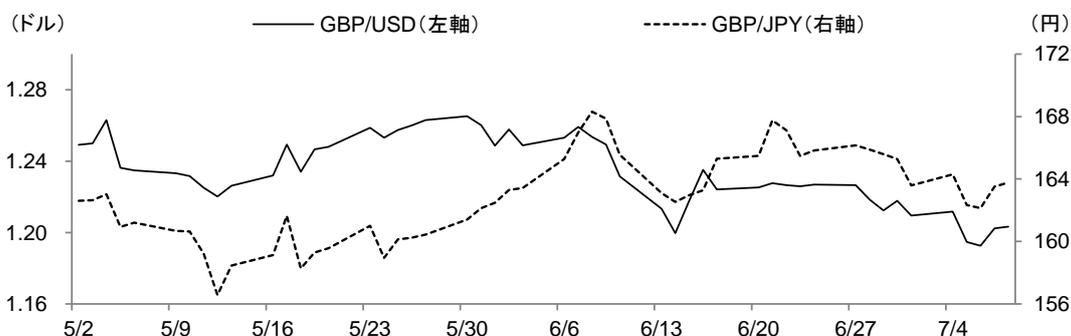
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、1.1900割れまで下落した後、1.20台まで戻すボラタイルな値動きが継続。4日、米休日のなかリスクオン地合いに1.21台で堅調に推移。5日、リスクオフ地合いのなかユーロドルは従前サポートされていた1.0350レベルを明確に割れる展開、ユーロドルのテクニカルブレイクが為替市場全体のドル買いを加速、英ポンドは英財務省スーナク氏と英保健相ジャヴィド氏辞任のニュースもあり、1.21台から1.19台前半まで大きく水準を下げる展開となった。辞表の中でスーナク氏は、ジョンソン首相の政治方針が自分と「根本的に違いすぎている」として、経済立て直しに必要な「難しい決定」を首相は避けているのだと示唆し、ジャヴィド氏は、「国益のために行動していない」と説明した。何がユーロの急落を引き起こしたのか、当時ははっきりしなかったが、ユーロは対ドルだけでなく主要通貨およびエマージング通貨に対しても大きく売られ、ドル買いの主役がユーロであったことは明確であり、米長期金利は低下したもののドル売りとはならず、ユーロ安を受けて米ドルが水準を上げる展開となった。その後、6日のアジア時間は1.19台半ばから前半にてレンジ推移。その後、ロンドン時間になると、前日からのドル買い地合いが継続し英ポンドは売りが強まり、更に下値を拡げ、対ドルでは一時1.1877まで売られ2020年3月以来の安値を更新した。7日、英ポンドは、対ドルでは結局1.20台まで買われる展開となったが、これは、それまで高まっていたジョンソン首相への辞任圧力に屈して党首を退くと表明したからではなく、前日までのポンド安が過剰であったからであると考えられる。内閣者の約3分の1(52人)も24時間以内に政権を辞任していれば首相の辞任発表はある程度予想することができ、市場もそれを織り込んでいたと言えよう。英ポンドの反発を招いたのは、対ドルでの1.20台割れは売られ過ぎの水準であり、割安感から買い戻しが入ったものと考えられる。

今週の英ポンドは、レンジ推移を予想。上述の通り、先週のポンド安を誘ったのはユーロの暴落と、英政権内閣者の相次ぐ辞任発表による、英政権および英経済動向を懸念したやや過度なポンド売りであったものと解釈。前者に関しては、米6月雇用統計は予想対比強い数字ながら指標後のドル買い地合いは限定的、先週金曜日クローズ時点ではユーロが1.01台半ばレベルまで値を戻しており週初から継続するドル買い地合いが一巡したと思われる。後者に関しては、ジョンソン首相が自らの辞任を発表し9月までに次期首相が決定するまで「大きな方向転換」や「大きな財政上の決定」をすることはないと約束しているように、英政局を巡る不安は一段落したと考えられる。次期党首に関しては、党首選の公式日程は早くも来週中に決定される見通しで、すでに支持集めに動いている立候補も複数名いる。どちらかといえば、今週のポンドの動向は再び、米長期金利の動向や経済指標に影響され、一旦英政権の動向は英ポンドの材料にはならないものと予想。指標としては、11日のロンドン時間朝7時に発表予定の英5月鉱工業生産(前月比)およびその全体の80%を構成する製造業生産(前月比)に注目しておきたい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(7/4~7/8)の値動き: (対ドル) 安値 1.1877 高値 1.2164 終値 1.2032
(対円) 安値 160.40 高値 165.29 終値 163.76



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.6700 ~ 0.6940 91.00 ~ 94.00 円

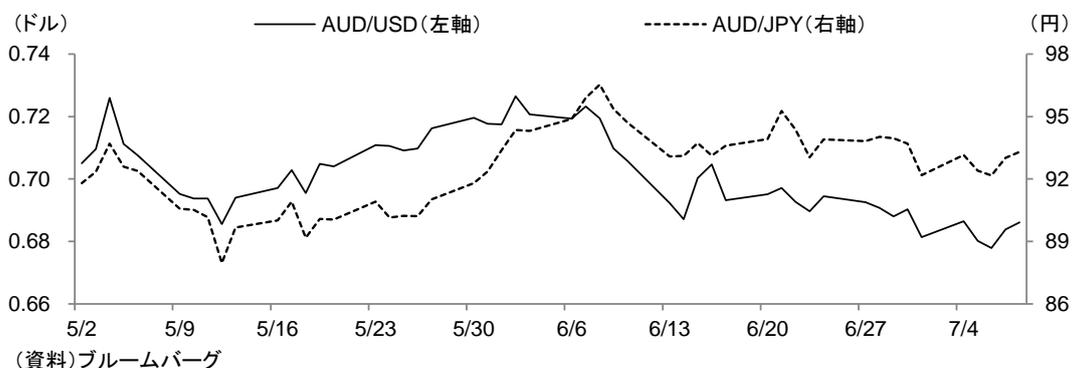
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.69手前まで上昇後、年初来安値を0.6762まで更新した。4日、豪短期金利が下げる中、0.68台を割ったものの0.68割れは買い手も多く間もなく0.68台へ回帰。その後RBAの利上げ幅+50bpを織り込む動きに0.6860近辺まで上昇した。加えて米国による一部対中関税を近く撤廃する可能性があるとの報道で0.69手前まで上昇した。5日はRBAを前に再び0.69手前まで上昇。会合では市場予想通り政策金利を+50bp引き上げ1.35%とした。声明文では6月声明文に記載されていた「家計消費の強い伸びを見込んで…」との文言が削除され、「家計は価格高騰や金利上昇からの圧力を受けている」との認識が追加された。発表後は0.6885から0.68台半ばまで下落。その後はリセッション懸念を背景とした逃避需要からドル買いが進行し、0.6762をつけた。6日は0.68ちょうどを挟んで上下に振幅。米債利回りが上昇するとドル買いを背景に0.6762まで僅かに年初来安値を更新した。FOMC議事録要旨では特段のサプライズはなく豪ドルは0.6780近辺で引けた。7日は再び0.6765まで下落。米金利が下げ、米株が上昇すると0.68台半ばまで戻して推移した。8日は0.68台前半で推移した後、米6月雇用統計の良好な結果を受けてドル買いとなり0.6792まで一旦下落。リセッション懸念は後退したが、FRBが高インフレ抑制の為に利上げを継続する道が開かれたとの認識が広がった。その後米株がやや上に戻す動きに豪ドルは0.68台後半まで上昇して越週した。豪ドル/円は安倍元首相襲撃の報道を受けて93.15円から92.30円近辺まで下落し、その後も乱高下しながら推移。NY時間は93.30円近辺へ戻して越週した。

今週は12日(火)に豪6月家計消費と消費者信頼感、13日(水)にNZ中銀金融政策決定会合、米6月CPI、14日(木)に豪6月雇用統計、15日(金)に中国4~6月期GDP、米6月小売売上高、米7月ミシガン大学消費者マインド等が発表される。現在バイデン政権による対中関税一部撤廃の協議がなされているが一方で中国の対ロシア支援を非難している事から今後の米中関係の行方に注目したい。また足許では新型コロナウイルスのオミクロン株派生型で感染力が強い「BA.5」の感染例が中国の複数都市で報告されており、ロックダウンが再開される可能性が懸念される。豪ドルは頭を押さえられる要因が出ている事に注意したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/4~7/8)の値動き: (対ドル) 安値 0.6762 高値 0.6895 終値 0.6856
(対円) 安値 91.53 高値 93.99 終値 93.31



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。